

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(出題の都合上、本文の一部を変えています)

熱中、夢中、脇目もふらない懸命さ、ということが好きである。

下の子が三歳で、ハサミを使い始めたばかりの頃のことである。晩秋の夕ぐれのことです。部屋はもう暗かった。四畳半の部屋中に新聞紙の切りくずが散乱し、もう随分長いこと、シャキシャキというハサミを使う音がかりがしていた。下の子は、切りくずの中に埋まって、指先だけでなく身体ごとハサミを使っていた。道具ではなくて、ハサミが身体の一部のようにも見えた。自分のたてるハサミの音のリズムといっしょに呼吸しながら、ただただ一心に紙を切っているのである。呼んでも振り向く様子ではなかった。熱中。胸を衝かれた。私は黙って障子を閉めることにした。夕飯は遅らせていい。

このようなことは、日常の突出点などでは決してなく、むしろ子供にとってはあたりまえのことなのではないだろうか。大人の側が、それを見過しているのである。大人たちは、子供の熱中して遊ぶ姿にふと気づくことがある。そして胸を衝かれたりもするのである。

しかし、と私は思う。大人の私が、子供たちが前後を忘れて夢中になって遊ぶ姿を、まま見落としているにしても、トウセツの、すこしも遊ばなくなった、といわれる子供たちに較べればカクタンによく遊ぶうちの子供たちにしても、私自身の子供時代に較べれば、やはり今の子供たちは、遊びへの熱意が稀薄なように思われてならないのである。

子供時代に遊んだ遊びを思い出す。罐蹴り、影ふみ、輪まわし、石蹴り、砂ぞり遊び、鬼ごっこ、花いちもんめ、教えあげればきりもない。これらはいずれも多くの仲間たちと群れをなして遊んだ遊びである。集団の熱気に統べられて遊んだ快い興奮を忘れることができない。

より多く思い出すのは、ひとり遊びのあれこれである。私が真に熱中して遊んだのは、ひとり遊びの時だったからである。集団遊びの場合は、何何遊びとか、何何ごっこ、れつきとした名前がついているのに、ひとり遊びは、ひとり遊びとしか言いようがない。よそ目には A が、その子供には B ことが多いからである。

A しらかみ(白紙)に 大きだ円を 描きし子は だ円に入りて ひとり遊びす (桜森)

おそらく子供は、ひとり遊びを通じて、それまで自分の周囲のみが仄かに明るいとだけしか感じられなかったエタイの知れない、暗い大きな世界との、初めての出逢いを果たすのである。世界といってしまうのは、あまりに漠然と、大づかみに過ぎるというなら、人間と自然に関わる諸々の事物事象との、なまみの身体まるごとの感受の仕方ということである。その時の、鮮烈な傷のような痛みを伴った印象は、生涯を通じて消えることはない。生涯に何百度サルビアの緋を愛でようとも、幼い日に見た、あの鮮紅には到底及ぶものではないのと同じように。

ひとり遊びとは、自分の内部に没頭するという以上に、対象への没頭なのであると思う。川底の小蟹を小半日見ているお飽きない、というようなことがよくあった。時間を忘れ、周囲を忘れ、一枚の柿の葉をいじったり、雨あがりのなまあつたかい水たまりを裸足でかきまわしたり、サイゲンもなく砂絵を描いたりするのが子供は好きなのである。なぜかわからない。けれどそれらは何と深い、他に較べようもないよるこびだったことだろう。

B 菜の花か のいちめん(野一面)の 菜の花に ひがな隠れて 鬼を待ちぬき (待っていた)

菜の花畑でかくれんぼをしたことがあった。菜の花畑は、子供の鬼には余りに広すぎた。七歳の子供の探索能力を超えていたのである。私は鬼を待っていた。もう何十分も何時間も待っていたのだ。待つことにすら熱中できた子供時代。今始まったばかりの子供時代の、ゆっくりゆっくり動いてゆく時間に身を浸しているとい(注4)う。識(し)闕(けつ)にすらのぼらない充足感があったにちがいない。時代もまたそのように大どかに動く時間の中にたしかに呼吸していたのである。今日のように、自然性を分断された風景というものはなかった。大きな風景の中に、人間も生きていられたのである。菜の花畑のむこうにれんげ畑、れんげ畑のむこうに麦畑があり、それらは遠くの山のすそまで広がっているはずだった。

子供時代が終わり、少女期が過ぎ、大人になってからも、ずっと私はひとり遊びの世界の住人であった。何かひとつのことに熱中し、心の力を傾けていないと、自分が不安で落ち着かなかった。こうした私の性癖は、生き方の基本姿勢をも次第に決定して行ったようである。考え、計算しているより先に、ひたぶるに、一心に、暴力的に対象にぶつかって行く。幸か不幸か、現在の私は、実人生でも、歌作りの上で、はるかに強く意識的に、このことを実践している。歌作りの現場は、意志と体力と集中力が勝負である。歌作りとは、チカラワザである。しかし一首の歌のために幾晩徹夜して励んだとしても、よそ目には遊びとしか見えないだろう。然り、と私は答えよう。一見役に立たないもの、無駄なもの、何でもないものの中に価値を見つけ出し、それに熱中する。ひとり遊びのホンリョウである。(河野裕子エッセイ・コレクション「たったこれだけの家族」より)

【注】 1 統べられて 影響されて 2 サルビア 花の名前 3 緋 明るい朱色 4 識闕 意識と無意識との境目 5 大どかに ゆったりと 6 ひたぶるに ひたすらに 7 然り そうですね

問一 線部アイカのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 線部①は筆者のどのような心情によるものか、次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 自身の世界でひたむきにハサミを使う娘の集中を邪魔しないようにしようとする思い
イ 幼児期の体験が将来の素質の目覚めにつながることを考えて、娘に期待をこめる思い
ウ 言語能力としては幼稚な娘が行動で何かを必死で伝えようとするのを受け止める思い
エ 失敗からの学びも大きいと自身に言い聞かせ、あぶないと注意するのを我慢する思い

問三 A 危険な行為に見える B 秩序正しいことと見えない C 独創的な行為に見える D 何をしているふうにも見えない E 悩みを忘れられる遊びである

問四 線部②「対象への没頭」について、 (1) 詳しく言いかえている部分はどこか、線部②より前の文中から三十五字以内でぬき出し、その始めと終わりの五字を答えなさい。(記号・句読点も一字とする。歌中の句と句の間の空白は字数に数えない)

問五 Cの歌の線部③とはどのような様子を表しているか、解答らんにしたがって、四十字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする。歌中の句と句の間の空白は字数に数えない)

問六 線部④とはどのようなことか、解答らんにしたがって文中の語句をあてはめ、わかりやすく言いかえなさい。ただし、ア は五字以内でぬき出して答えなさい。イ は四十五字以内でぬき出し、始めと終わりの五字を答えなさい。(記号・句読点も一字とする。歌中の句と句の間の空白は字数に数えない)

ウラにも問題があります。

問一 線部①はダグラス少年のどのような気持ちを表しているか、次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア いつも店の前にいることをサンダスン老人に怒られるのではないかと不安
 イ まだ履いたことのない運動靴がはたして自分の足に合うかどうかという不安
 ウ これからの自分の演技をサンダスン老人に見ぬかれるのではないかと不安
 エ ずっとあこがれていた靴が売れずにちゃんと残っているかどうかという不安
 オ 自ら用意した提案がサンダスン老人に受け入れられるかどうかという不安

問二 A に入るダグラス少年の発言として、次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア ぼくは切羽つまっているんです！
 イ 持っているお金はすべてかき集めてきたんです！
 ウ 掛け売りよりましな条件をもってきたんです！
 エ ぼくが欲しいのはその靴じゃないんです！
 オ 決してテニス靴を見ていたわけではないんです！

問三 線部②は何のどのような状態を表しているか、解答らんにしたがって二十五字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問四 線部③はダグラス少年のどのような様子を表しているか、解答らんにしたがって十五字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問五 線部④はどのようなことを表しているか、次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア ダグラス少年のあふれ出る言葉の数々が、サンダスン老人の同情心を引き起こさせたということ
 イ ダグラス少年のあふれ出る言葉の数々が、サンダスン老人の気持ちをいつの間にか動かしたということ
 ウ ダグラス少年のあふれ出る言葉の数々が、サンダスン老人に少年時代の輝きを思い出させたということ
 エ ダグラス少年のあふれ出る言葉の数々が、サンダスン老人の退屈をまぎらわせたということ
 オ ダグラス少年のあふれ出る言葉の数々が、サンダスン老人の信念を揺るがせたということ

問六 線部⑤はサンダスン老人のどのような様子を表しているか、解答らんにしたがって三十字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問七 B . C にはそれぞれ次のどちらが入るか、記号で答えなさい。

ア おとな イ 少年

問八 線部⑥はどのようなことを表しているか、次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア ダグラス少年がサンダスン老人のためにする仕事はこれ以上ないので、将来は自由に職業を選んでよいということ
 イ ダグラス少年はサンダスン老人とテニス靴の魅力に分かちあえたので、今後は遠慮せずに店に来てもよいということ
 ウ ダグラス少年はテニス靴の代金を十分に支払ったと言えるので、サンダスン老人のためにこれ以上働く必要はないということ
 エ ダグラス少年はサンダスン老人の靴に対する情熱を受け継いだと言えるので、これ以上二人で話す必要はないということ

問九 サンダスン老人がダグラス少年の提案を受け入れたのはなぜか、次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア ダグラス少年のおかげで、靴の魅力に改めて気づき、靴屋としての自分自身のあり方を考え直せたから
 イ ダグラス少年の靴への強い思いに圧倒され、靴の代金が足りないことなどとしたことではないと思えたから
 ウ ダグラス少年に仕事を手伝ってもらう方が、代金の不足分よりはるかに商売としては得であると判断したから
 エ ダグラス少年の純粋な靴への愛情を知り、いつの日か自分の靴屋の商売を引き継いでもらいたいと考えたから
 オ ダグラス少年の言うとおりテニス靴を履いて動いてみたことで、夢見るような感覚を思い出し、共感したから

問十 線部⑦の説明として、次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分がガゼルやカモシカのようになってジャングルを走り回る野性的な夢の世界から、都会的な大人の世界に戻っていったということ
 イ ガゼルやカモシカが飛びまわる、野性的で危険なジャングルから、人工的ではあるが、文化的な生活へと戻っていったということ
 ウ ダグラス少年の話聞いてるうちにわいてきた野性的な世界の幻想を振り払い、新鮮な気持ちで日常生活に戻っていったということ
 エ ダグラス少年がガゼルやカモシカのようにジャングルに消えていってしまい、寂しさを抱えつつ、自分の持ち場へ戻っていったということ

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(出題の都合上、本文の一部を変えています)

話し手、聞き手、働き手というふうには、「手」はよく人を表わす。「手を貸す」「手が足りない」というときの「手」はとくに A 力の意味でいわれる。「手伝い」「手当て」「手ほどき」というときには、相手の身になり、尽くす様子がよく出ている。「手数」「手間」「手応え」「手厚い」「手堅い」というときにも、何かを一つ一つていねいに、真心を込めて取り扱うさまがよく表われている。人を大事に B ときには「手塩にかける」とか「手をかける」とかいう。逆に、あることをないがしろにしたり、いかげんな扱いをするときには、「手控え」「手抜き」「手ぬかり」「手加減」「手ぬるい」などという。それほどに「手」は重要な意味をもつ。

救われるのはしかし、助けの手を差しのべられる人だけではない。助ける人、つまり手になる人、そう、使われる人もまた救われる。「おまえの代わりなんかいくらでもいる」「それをするのは別にあなたでなくてもいい」ではなく、「これはおまえにしかできない」「これを託せるのはおまえしかいない」と言われるとき、ひとはじぶんが「ここにいる理由」を見いだすことができる。(代替)ではなく(代理)として、である。ここでは、子どもが生まれてはじめて「おつかい」を頼まれるときの誇らしげな顔をつい想像してみたくなる。だれかに宛てにされているという喜びである。その返礼のしるしとして、大人からもらう「お小遣い」。「手になつてくれてありがとう」という言葉にはきつと、「使つてくれてありがとう」という言葉が反映しているはずだ。

「頼む」というのも、だれかに力(力)を貸してくれるよう申し入れることだが、ここには「いざという時に期待に込めてくれると信じて、その力を当てにする」という含意がある(『新明解国語辞典』第七版)。とくにこの場合には「恃む」と書き表わす。ちなみに古語では「たのむ」に「一身を託す」という意味もある。「主人と仰ぐ」ことも「たのむ」と言った。その意味でも、だれかに恃まれる喜びは、だれかに使われる喜びでもある。

子どもが「おつかい」を頼まれて大いばりになるのは、そういう頼(恃)みの相手としてじぶんが選ばれたからである。恃むに足る存在として承認されたからである。「ここで」「頼(恃)み」は「選び」に通じている。ほかならぬこのわたくしが選ばれるという経験は、ひとに矜持を与える。ひとはだれかに、頼むに値する者として選ばれることで、そういう者として承認されることで、みずからの存在理由を手にする。

しかしそこには同時に、落とし穴がある。じぶんが選ばれたということ、ひとは、じぶんがそれをするに値する存在であるから、つまりは優れているからと勘違いしがちだからだ。これはしかし「選抜」「選別」をいうのであって、恃まれるという意味での「選ばれ」ではない。「選別」は優劣の差で人を分けること、そしてそこに待遇の差をつけることをいう。(中略)こんなちっぽけなわたしにも声をかけてくれる人がいると控えめにそれを受けとめるのでなく、呼びかけや促しを過大に受けとめて、じぶんを選抜された人間(選良)エリート)と思ひ違えるのである。

いうまでもなくこれは、けつして安住の場所ではない。「選抜」「選別」というかたちでの選ばれは、いつ選ばれなくなるかという不安と底を通じているからである。その意味での「選ぶ/選ばれる」という関係は、じぶんがある条件を満たしているかぎりで選ばれるという関係であるから、一つ間違えはそのじぶんが別のだれかに置き換えられるという不安を拭い去ることはできない。「選ぶ/選ばれる」という関係に入ること、選ばれるじぶんは選ばれないこともありうるということ、そういう場所に立つことである。「人を選ぶ」という態度は、結果としてみずから「人を選ばれる」存在に貶めてしまう。そのかぎりでは選ばれない存在に転落する不安に、ひとは最後まで苛まれる。(中略)とすれば、ひとにとつて重要なのは「選抜」でも「選別」でもない「選ばれ」のなかに入ることであろう。

(鷺田清一『本の窓』二〇一五年八月号「つかふー使用論ノート」より)

- 【注】 1 託せる＝任すことができる 2 反照している＝反映されている
3 含意＝含まれている意味 4 矜持＝誇り、プライド

問一 A B に入る言葉として次の中から最も適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 見守る イ まとめる ウ 育てる エ 支援する オ 指導する カ 引率する

問二 次の1～5の——線部について、例にならない、すべての○にひらがなを入れて、下の意味となるように言葉を完成させなさい。

例 やつと手があつた (ひまになる)

事件の手がかり (解決のきっかけ)

- 1 彼とは手を○○ (関係を断つ)
- 2 この仕事は手に○○○ (能力をこえる)
- 3 英文学の手○○ (入門書・案内)
- 4 手○○○がよい (準備)
- 5 手○○○で喜ぶ (無条件)

問三 ——線部①・②と同じ内容の二字熟語をそれぞれ文中からぬき出して答えなさい。

問四 ——線部③とはどういうことか、次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 誰かを助けて感謝されるということは、同時に自分が相手に奉仕できた喜びを与えてくれるものである
イ 誰かを助けて感謝されるということは、同時に相手が自分を認めてくれたことへの感謝でもある
ウ 誰かを助けて感謝されるということは、お返しに相手が自分の行為に支払う報酬なのである
エ 誰かを助けて感謝されるということは、お返しに相手が自分の身代わりになつてくれるということである
オ 誰かを助けて感謝されるということは、苦勞は買つてもせよという教えに基づくものである

問五 ——線部④とはどのようなことか、本文の言葉を用い、解答らんにしたがつて答えなさい。ただし、A I にはそれぞれ十二字以内の言葉を入れなさい。(記号・句読点も一字とする)

